

第3回 八王子市市民参加推進審議会（第7期） 会議録

会 議 名	第3回 八王子市市民参加推進審議会（第7期）	
日 時	令和3年（2021年）10月16日（土）午前9時45分～午前11時45分	
場 所	生涯学習センター（クリエイトホール）11階 第7学習室	
出席者氏名	委 員	小林勉委員、山本薫子委員、井出勲委員、岡崎理香委員、田中泰慶委員、星原徳之委員、山田真実委員
	説 明 者	—
	事 務 局	渡邊和樹（広聴課長）、宮野努（広聴課主査）、菅野季代美（広聴課主任）
	そ の 他 市側出席者	古川由美子（総合経営部長）、小俣英一（総合経営部若者政策担当課長兼子ども家庭部青少年若者課長）
欠 席 者 氏 名	繁野遥香委員	
議 題	1. 諮問事項「若い世代の市民参加の推進について」の議論 （1）配布資料を基に意見聴取	
公開・非公開の別	公開	
非 公 開 理 由	—	
傍 聴 人 の 数	なし	
配 付 資 料 名	資料3-1：若い世代（39歳以下）のうち、現役・就労世代（学校教育終了後）の市民参加の現状、課題、方策 参考1：市民参加推進審議会（第7期）開催予定と実績 参考2：第7期市民参加推進審議会＜若い世代の市民参加に向けた各年代別の区分＞ 参考3：市政世論調査報告書（抜粋）	
議 事 内 容	次ページ以降のとおり	

【議事内容】

開会

- 小林会長
- ・第3回市民参加推進審議会を開催する。
 - ・本日は半数以上の出席があるため会議は成立する。
 - ・傍聴を希望される方はいるか。

(事務局確認するが傍聴者なし)

- 小林会長
- ・では「若い世代の市民参加の推進について」の議論に入る。

1. 諮問事項「若い世代の市民参加の推進について」の議論

(1) 第2回審議会の論点整理

小林会長 【第2回審議会の内容】

- ・第2回市民参加推進審議会は書面開催という異例の開催となった。皆様から「現役・就労世代の市民参加に関する現状等」について、意見をいただいた。資料3-1は内容別にまとめたもの。

【審議会スケジュール】

- ・次第「(2) 配布資料を基に議論」に入る前に、今後の審議スケジュールを再度皆様と共有する。
- ・第1回の際にスケジュールを配布したが、新型コロナウイルス感染症の影響で開催が延期されたので、本日配布の「参考1」で修正版のスケジュールを作成した。
- ・市長から2点「諮問」されており、一つが「若い世代の市民参加の推進について」、これは本日これから審議するもの。もう一つは「市民参加条例の運用状況の検証について」になる。
- ・「若い世代の市民参加の推進」を、本日、11月、12月で審議し、「市民参加条例の運用状況の検証」については、2～3月、4～6月で審議する予定。その後は来年11月に市長へ「答申」するため、第7期の審議結果のまとめを7月～10月に2回程度実施する。

小林会長

- ・ここままで質問等あるか。

(質問なし)

小林会長 【若い世代の市民参加に向けた年代別の区分】

- ・次に、「参考2」のとおり、「若い世代の市民参加に向けた各年代別の区分」で、第7期の審議対象を示している。
- ・しかし、委員から第7期のゴール、具体的な議論の内容が分かり難いとの意見があったため、再度確認しする。
- ・若い世代の中でも、学校教育を終了した39歳以下の市民に焦点をあて、市民参加を促進する方法についてご意見をいただいでいく。
- ・このために、第2回では、39歳以下の現役世代の市民参加の促進に向け、市民参加の概念を広くとらえ、参加の状況、参加のし難さ、課題、よい方向に進むための方策などについて、意見をいただいた。
- ・年内の審議会では、この「39歳以下の現役、就労世代」の市民が、どうすれば市民参加に興味を持ったり、参加するようになるのかについて、さらに考えていきたい。

【市政世論調査抜粋版】

- ・「参考3」は、令和3年の市政世論調査から議論の参考になりそうなものを抜粋したものであり、活用いただければと思う。
- ・前期の第6期審議会では小中高大学生という学校教育の枠組みの中にある、学校教育のチャンネルを通し、若者にどう働きかけるかに焦点をあて、集中的に審議した。今回の第7期審議会のターゲットは、学校教育の枠外にいる若い世代の方々になる。

【第2回審議会での意見】

- ・第2回審議会での意見をまとめた「資料3-1」が本日の審議資料になる。
- ・1枚目は、「すでに参加している市民」について現状、課題、方策はどうか。2枚目は「参加予備群」。これはきっかけがあれば参加しそうな方々の現状、課題、方策。3枚目は「関心がない市民」として捉えた場合の現状、課題、方策になる。
- ・1枚目の「すでに参加している市民」のシートを見ると、「現状」としては「地域活動への参加」「参加のきっかけは子ども」など挙げられている。この「地域活動への参加」についての「課題」は時間的、地理的制約により、参加者が限定される傾向にあるとの意見がある。その他の課題としては、「活動のわずらわしさ」の中で、市の職員の担当者が変更になると、それまでの対応と異なる対応がとられることがある。これは庁内の引継ぎの問題、職員の能力を人事異動で人が変わっても能力が変わらないようにしてもらおう余地があるという意見。
- ・次の「参加のきっかけは子ども」についての「課題」は、「子どもが卒業してしまうと活動も卒業してしまう」という意見があった。関連意見として「子どもを通じての活動を次につなげるネットワークづくりがうまくいっていないのではないか」という意見もいただいた。他には「すでに参加している」方も経済的、時間的な制約を受けるという意見。「関連、関心ある分野以外の情報をキャッチできない、しない」という現実があるのではないかという意見があった。また、「主催者と参加者とのギャップ」ということが「課題」として出されている。
- ・2枚目は、「参加予備群の市民」に関するシート。
- ・何かきっかけがあれば参加してくれる市民がいるのではないかと、という市民の「現状」「課題」「方策」になる。
- ・「現状」は、「参加のきっかけがわかりにくい」という状況があるのではないかとという意見。「課題」は「きっかけがなかったり」「情報が市民のところまでたどり着いていない」、「方策」は「SNSを利用したもう少し情報が届きやすいしくみづくり」が必要ではないかとという意見であった。
- ・また、「市政世論調査 抜粋版」の20ページに市政情報をどこから得ているかという質問がある。この調査を見る限り、最も多い情報の収集方法は広報はちおうじとなっている。残念ながらLINE、Twitter、Facebook というものは余り活用されていない。主要な情報入手先である広報はちおうじをより見やすくするなり、充実させるなり、そういったことが必要ではないかとということが、資料3-1の2枚目のシート「方策」の「きっかけづくり」に書かれている。他に「参加するための情報が届いていない、キャッチできていない」という「現状」への「課題」として「参加へのハードルがある」「参加への負担がある」のではないかとという意見があった。
- ・3シート目は、「関心を有していない市民」。この「現状」は、「時間的・精神的・経済的余裕がない」という意見。「課題」は、市民側から見ると市役所の職員は遠い存

在になっているのではないかという意見。「方策」は、職員は市民目線を意識して、窓口業務の重要性の認識を高める研修を徹底することが必要という意見など、皆様から頂いた意見がまとめられている。

小林会長
(質問なし)

- ・質問等あるか。

(2) 配付資料を基に議論

小林会長

- ・本日の議論だが、「すでに参加している市民」について課題はあるものの、議論の時間も限られているので、2枚目「参加予備群の市民」、何かプッシュすることで参加が期待できる方、参加の方向にもっていけそうな方を、どういったことがあれば「参加」へシフトしてもらえるかについて、皆様が活躍している領域や経験に基づき、意見をいただきたい。

- ・発言しづらいと思うので、まずは渡邊広聴課長から、これまでの実体験を披露いただき、その後、皆様からも意見をいただく。

渡邊広聴課長

- ・一つ目は、成人式の担当をしていたときのことです。応募してきた学生から、「やりたくない」と相談を受けた。その理由は多くの来場者の前で話すことは「恥ずかしい、上手く話せない」ということでした。私は、20歳までに「どう生きてきたか」、「こんな思い」があった、「こんな経験をしてきた」ということを話せばいいんじゃないかとアドバイスを試みました。その学生は、決してやりたくないということではなく、尻込みをしていた状況でした。今までのトラウマ的な出来事、挫折の繰り返しにより、そのたびにいろいろ言われたりした。それでもやってみたいから応募したが、やっぱりいざとなると怖くなってしまったとのことでした。その後、親御さんから聞いた話だが、あることで悩み、落ち込んでいた時期だったようだ。そんな時に成人式の話を知り、申し込み、迷った末、肩を押してくれたことで、今は前向きになってきたと言われた。もしこんな経験ができるのなら他の人にも伝えたいとも言われた。

- ・もう一つは、野良猫の糞尿被害について、なかなか有効な対策が打てず困っているとの相談を受けていたときのこと。大学の学生たちに講義をする機会があったので、こういった問題が起きていることを知っているか聞いてみたところ、学生たちはまったく知らないといった反応だった。そこで、糞尿の問題について一緒に考えてもらえないかお願いしたところ、学生たちはいろいろな視点から考えてくれた。その内容は、「猫は習性として匂いに敏感」だということ、「耳が良い」こと、「猫を来させないためには花壇にこういう花を置くだけで自然に猫が来なくなる」ことを自分たちで猫カフェなどに行き調べてくれた。この情報を相談者に話したところ、そういう方法があることを調べてくれたり、一緒になって考えてくれた人がいるということがわかったことで、少し打ち解けた感じとなった。

- ・これは自分だけでは解決できないことを人を巻き込み解決の方向に向かった体験談である。

小林会長

- ・広聴課長の事例のように些細なことがきっかけになる。委員の皆様からも意見をお願いする。

岡崎委員

- ・今回は「若い世代」ということだが、市民活動やボランティアは、今までシニアの殿堂というイメージがあり、若い世代にはとっつき難いイメージがあった。市民活動支

援センターの利用も若い世代はほとんどなかった。しかし、若い世代でも参加できる企画などを発信することで、少しずつではあるが若い世代が市民活動支援センターに足を運んでくれるようになってきた。

- ・市では未来デザイン室主催で未来の八王子についてワークショップを実施しているが、市民活動支援センターでは夏休みに中学、高校生に限定し、もっとざっくばらんにどんな八王子になってもらいたいのか、今、自分たちは八王子のどんなところが好きか、嫌いか、八王子の未来は自分たちがつくるという意識をもって、自分たちがつくりたい八王子はどんなものかをグループワークを行い、発表してもらった。そして、その結果を市民活動支援センターに展示したところ、今まで足を運ばなかった中学、高校生が展示を見に来てくれた。これらの参加の機会、きっかけが分からないその世代にはイベントのPRを多くやっというと考えている。
- ・また11月には、学生に向けたSDGsのゲームを使ったまちづくりシミュレーションゲームをやってみようというイベントを実施する。大学コンソーシアムにも協力をいただき各大学に情報発信するが、中央大学のボランティアセンターの方には、これは面白い企画なので発信すれば興味をもって参加してくれる学生がいるかもしれないということだ。その対象は、実際にボランティア、市民活動をしている大学生ではなく、カードゲームという若者に受けするものをきっかけとした、まちづくり、地域創生について皆で考えてみようというもの。この情報を発信し、お手伝いする大学生を募ったところ、打合せのために市民活動支援センターに足を向けてくれる学生もちらほらいる。このような参加のきっかけの仕組みというか、仕掛けが重要だと思う。
- ・先ほど広聴課長の話にもあったが、相談すること、仲間をつくるということで、今までは自分一人だと思っていた、一人ではできないと思っていたことが、視野が広がると思う。
- ・若い世代に関する例ではないが、我々の活動に「八王子志民塾」というものがある。これは主に、シニア向けで、退職後の第二のライフステージをいかにいきいき、有意義に過ごすか、というところから始まったもの。志民塾に入塾する動機は、やはり地域のことがわからない、自分一人では何をしたいのかわからない、しかし、何か八王子のためにしたいという方が非常に多い。現在、13年目の13期ですが、卒塾生は皆、そこで仲間を見つけ、志を同じくする人と何か活動を立ち上げている人がたくさんいる。
- ・このように仲間づくりは大事だ。一人では活動できなかつたり、一人では敷居が高くても、仲間がつくれる場所、自分の思いを語れる場所、このような場所づくりは必要だ。志民塾はシニア向けだが、若者版があるといいのではないかな。
- ・自分の子育ての経験からすると、子どもの学校卒業が親の活動の卒業になっている。子どもが小学生のときに、「お父さんの会」というものがあつたが、主人も子どもの卒業とともに親の卒業になってしまった。しかし、気の合う仲間をつくることで、ずっと活動が続くこともある。近所でもそういうお父さんが、子どもがお世話になった小学校で花壇を今だにつくっており、仲間づくりの場はとても重要だと思う。
- ・それから、資料3-1の「参加予備群の市民」の「現状」の一番上に、テレワークになったことで、日中自宅にいる就労世代の中に何かやりたいと思う人がいるのではないかとの意見があつた。先日、市民活動支援センターに寄せられた就労世代の方の意見だが、テレワークとなり、通勤の必要がなく、家にいる時間が多くなったので、地

域のために何かしたいが、何をしたいかわからない。多分、自分以外にもたくさんいると思うというものだった。この方は大手企業にお勤めのようで、今、企業にはCSR部門があり、会社主催の社会貢献事業がある。そういう部署に所属してNPO、NGO活動をしていたようだが、活動範囲が海外や都心だったため、会社に出勤しなくなることでそれができなくなり、地元で何かをやりたいと思ったものの、やる場所がわからないという状況だったようだ。だから活動の内容や場所を紹介してもらえるとありがたいということだった。

- ・この方は、予備群なのか、すでに参加している方なのか、分類は別にして、こういう窓口をつくるのが大事なことだ。実際、市民活動支援センターでもプロボノ登録をやっているが、今年になってから社会福祉協議会、高齢者いきいき課が地域での絆プロジェクトにおいて地域でのプロボノということをやっている。また、オリパラの際に登録したボランティアをレガシーとしてもっと地域で活用しようということが東京都でも事業としているようだ。市民活動支援センターでもプロボノ登録をお願いしているので、これでは縦割りで、人材が散逸したり、登録したい人も市民活動部門に行けばよいか、福祉的な社会福祉協議会に行けばよいか、迷う人もいる。できることなら、窓口を一本化して、そこで本人の意向を聞き、振り分けができるとよい。
 - ・イベント後のアンケート調査でも、大学生も中高生も活動できる場があれば活動したいとか、来年もこういうイベントがあればぜひ参加したいという意見があった。就労世代の場合には仕事もあるので、学生とは状況が異なるが、若い人でもやりたいと思う人もいると思えた。この市政世論調査の「きっかけがあれば参加したい」などの数字は、実際もそうだと思う。
- 小林会長
- ・非常に幅広い領域で連携し、様々な仕掛けをされていることがわかった。このような取組があることは皆様はご存知でしたか。
- 星原委員
- ・様々な取組や、大学生へのアプローチなどの活動があるということは、概念として、そういうことをやっている人がいるのかなとは思っていたが、具体的な情報にまでは接していなかったので初耳だ。
- 山田委員
- ・私も知らなかった。生まれも育ちも八王子で、親が広報をよく見ていたので、1日と15日に発行される広報は楽しみだった。具体的内容までは分らないとしても、こういうものがあるんだということで見ている。見る機会が減っていたが、この審議会の委員になり、また見始めたところ、いつの間にか広報がカラーになっていたり、ホームページでも見れることを知った。
 - ・参加予備群だった私に、参加のきっかけが市から郵送され、市民委員候補者に登録したことで委員に選んでもらえ、参加の場を与えてもらった。
 - ・また、住んでいる地域は自治会活動が活発で、親は町会に加入していたり、八王子まつりにも参加した。地域では廃品回収もやっており、自治会活動には興味があったものの、なかなか入り込めず学生を卒業し、就業とともに自治会からちょっと遠のいてしまった。
 - ・社会人となり、現在、情報源は少ない。インターネットには情報があってもキャッチのしづらさがある。職場が相模原市内であるため、そちらの情報はキャッチしに行っている。一方で、八王子市の情報は収集しにくさを感じる。職業柄、新型コロナの発生数が気になるのでよく見ているが、八王子市はどこでフォローできるのかかわか

らなかった。相模原市は市長が発信している。他にも停電、断水すると災害情報として発信している。八王子市も防犯情報で不審者情報はキャッチしている。

山本副会長

・相模原市の情報はどのツールから入手していますか。例えば、市のホームページとか、Twitterとか。八王子市の場合はどういうツールを使っているのか。

山田委員

・相模原市は市長の Twitter ページをフォローしています。市長のほかの活動内容も出てきてしまいますが、その中に、「本日のコロナの感染者数」が掲載されています。八王子市の場合は、帰り道が危ないので防犯情報をフォローしている。それから八王子のニュースに紐づくページ、例えば、最近では京王八王子と八王子駅の間に新施設ができるというニュースを見た。これも興味があるからこそ見ている。

田中委員

・自分が属している町会の例だが、班長が輪番制で回ってくる。回ってきたその時はいやだなと思いながら、皆、参加するが、参加しているうちに町会の活動などへの認識が少しずつ深まり、そんな時にぜひ来年度も役員をやってくださいと言われると、続けてしまうことがある。なかなか役員のなり手が少なかったが、きっかけがあつて役員になり、活動内容が分かってくると参加しようという雰囲気もできてくる。私が会長のときは十数人の役員が一生懸命活動していて、役員をもっと増やしたかったがなかなか増えなかった。最近では、30人を超えているようだ。だからこそ、きっかけは必要だと思う。

・また、ボランティア活動は、オリパラの場合には目的がはっきりしているし、期間が限定されているため、参加しやすい。テーマによっては長期間になることがある。こういう場合には、個々での参加というよりは、仲間をつくって一緒に活動してもらうことも必要である。岡崎委員からもお話があったように仲間づくりが大切だと思う。

・仲間のつくり方には課題があるが、仲間をつくりこの仲間に、こういうテーマで考えてくれないか、議論してくれないかとお願ひし、やり方はワークショップでも何でもよいが、こういうことをやることで参加予備群の人が現役の参加者になっていくと思う。

・また、テーマだが、やはり「身近な」、「日常的な」テーマがよいと思う。余りにもかけ離れたテーマだと「無理だ」、となってしまう。例えば、市の市政施行記念日などは期間が限定されているので、これをどう盛り上げようかということで市民に参加してもらう方法もあると思う。こういう具体的なことを市が市民に投げかけることが、一つのきっかけになる。

井出委員

・私がボランティアセンターで仕事を始めた平成の初めの頃は、ボランティア活動はシニアや主婦が中心で、活動対象は高齢福祉が中心だった。その活動がいろいろと施策にも活かされ「センター元気」ができた。

・現在、39歳以下の現役世代の参加が多い活動に子ども食堂である。コロナ禍でも活動団体が増えている。会食はできないので食材配布に切り替え活動を続けている。今、子ども食堂や地域食堂に関わっている人たちは、10年後20年後の八王子の施策を担っている人たちになると思う。

・そういう方々に聞き取りしたことを第2回審議会の意見として記載した。そしてこの方々は、先ほど田中委員のお話にあったように「明確なテーマ」がある。活動の中心を担っている方々は、結婚、仕事をしており、子どももいて、かなり、時間的にも忙しい人たちだが、それでも活動している。

- ・さらに、以前のボランティアと違って、インターネットや SNS で活動場所や仲間、資金を自分たちで見つけている。非常に頼もしい、知識と行動力がある方々が多い。社会福祉協議会や行政などの公共の部門への要望も「明確なテーマ」を持っている。活動の支援する方法は以前とは異なる。

- ・「参加予備群の市民」がボランティア活動をはじめ市民参加の情報を得るため、社会福祉協議会、市民活動支援センター、センター元気、ファミリーサポートセンターなどにアクセスし、それぞれの団体ごとに登録することになる。また、こうした情報は入手しづらく、自分から取りにいかないと得られない傾向がある。以前からこの辺がもう少し何とかならないかと思う。

岡崎委員

- ・福祉に関するボランティアはこちら、市民活動はこちらというようになっている。しかし、ボランティアをやる方としては福祉だろうが市民活動だろうが一緒である。

小林会長

- ・市民参加は横串でつながっているが、縦のセクショニズムだと馴染まないというか、かえって障害になってしまう。積極的に活動をしている人になればなるほど壁を感じるのだろう。

田中委員

- ・町会・自治会活動をしていると、市の縦割り行政は非常にネックになる。内容によって所管が別々で苦勞する。

- ・また、未来デザイン室が中学校区ごとに 2040 年に向けワークショップをやっている。参加者は町会長や住民協議会の人で、若い人ではない。2040 年に向けたまちづくりは若い世代に関係する。我々世代は 20 年後には生きてないでしょうから、皆、感覚で話をしている、現状の話ばかりになってしまう。このまちづくり、地域づくりの中に 39 歳以下の若い人を引っ張り込んだ方がよいということをも未来デザイン室に提案した方がよい。

井出委員

- ・これまで市役所は縦割りで、腰が重い印象があった。今回は中学校区に出向き、各所管から若手職員も集め、住民の声を聴くことはよい取組みだと思う。

小林会長

- ・行政特有のロジックもあると思うので、その辺のことを審議会として情報を共有させていただければ思う。

古川部長

- ・縦割りということは皆様以外からも言われていること。専門性が必要なこともあり縦割りになっている部分がある。一方で社会情勢も変化している中、いろいろな方向から考える必要もある。答えは一つではなく、行政もいろいろな視点からの体制が必要だと思う。

- ・若い世代の参加は非常に難しいが、話を聞いている中で、行政が上手く情報発信できていない部分があり、きっかけづくりもできていないようだ。ワークショップなどにより、様々、工夫しているが、若い人が参加していないという現実、行政からのアプローチが不十分だったのだろうと思う。これから「市長と語る」や「市民フォーラム」を行うが、そこには若い世代を入れていきたい。

渡邊広聴課長

- ・未来デザイン室のワークショップで、若い人が参加しているグループの話を聞いていた。若い人が提案し、年配の人が興味を示し、話が広がっていった感じを受けたので、多世代が入った方がよいと思った。山田委員のお話にあったように、情報を知らなかったとならないような発信の仕組みが必要だと思う。

岡崎委員

- ・マッチングできる場が重要だ。これもシニアの例だが、私たちはずっと「お父さんお帰りのパーティー」をやっている。これは他市で知られている。シニアのセカンドライフを充実するために、会社から地域に帰ってきた企業戦士だったお父さん

に地域にはどんな活動があるのかを市民活動団体の方に出席していただき、そこを巡ってもらい、興味ある団体、活動を探したり、仲間を見つけてもらい、一緒に活動するというマッチングイベントのようなものを、会社退職時期の3月に年1回やっていた。今度からはシニア世代だけでなく、多世代向けに、「お父さんお帰りなさいパーティ」を改め「地域デビューパーティ 802 (八王子)」という名称で多世代が参加できるようリニューアルし、来年3月開催に向け計画している。このようなマッチングイベント的なことを年1回だけでなく、何回も行えばきっかけづくりもできると思う。

- ・ボランティア活動や地域活動は、自分がしたいこと、好きなことをやることで、長続きして、生きがいになる。また、自分たちの課題は自分たちが一番知っているの、そのために仲間をつくって一緒に活動し、そこに行政などが応援、サポートに入ることによって上手くいくことがたくさんある。行政や、我々の市民活動支援センターが主導というのではなく、自発的にこのような活動が生まれ、うまくサポートし、マッチングさせることが有益だと思う。

小林会長

- ・活動している方は多岐にわたり活動されている。八王子在住の学生でも、皆様の活動内容は知らないと思うので、その溝を埋められればと思う。これをゲームソリューション的に言って、届くところには届いていて、知れば知るほど魅力的な活動はいっぱいあるが、一方で若者などをキャッチアップできていないことから、星原委員の領域からアイデアや意見はあるか。

星原委員

- ・岡崎委員や田中委員の話では、「きっかけづくり」ということが共通していた。これは絶対の課題だと思う。そこにアプローチできないという問題があるために、そういった活動があること自体を知ることができない。もし知っていたら参加したのという人もいると思うので、そもそもそこにハードルが出来てしまっている。市が市民参加してほしいと考えても、具体的に何に参加してほしいのかが分からなかったり、情報が下りてこないことでハードルができています。また渡邊課長の話にあった、何かをやって、こういう結果が得られたという、好転したことを発信すれば、他の地域で同様な問題で悩む人の解決のヒントになる。この結果に関する情報発信も行き渡っていない。つまりそれぞれの段階での情報発信ができていないと思う。
- ・また、岡崎委員の話にあった参加者が自発的に活動していくということも、ゲームの中でもユーザージェネレイテッドコンテンツ、ユーザーがゲームの中で自分たちが自発的にさらに遊びをつくって遊んでいくというような仕組みがあれば、ユーザーが新しいアイデアや活動をつくっていくことがある。このためにはそもそもその仕組みがないと自分でつくろうという気にもならない。そこに関しても情報発信が必要である。いずれにしても情報が足りないというとは共通しているので、どう発信し、次に繋げていくのかが全体的な課題である。その制度はありますよというように、まずハードルを下げて展開することが必要だと思う。

小林会長

- ・星原委員の領域で考えると、オンライン上でもコミュニティが出来てしまうと、放っておいても自発的に動き出すものだろうか。

星原委員

- ・その活動を「見える化」していて、参加したいときに、参加の方法も掲載されていれば、自由に参加して、また新たな活動に進展することがある。その仕組みづくりが必要であるとともに、明確に開示されていることが大切。仕組みがあっても閉じていたりすると参加できない障壁になる。オープンで、かつ、分かり易く、開けて

いる、常に発信している状態が必要である。

小林会長

・問題は、「見える化」されていないというところ。知っている人にとっては知っているが、知らない人は全く知らない。非常に貴重なご意見をありがとうございます。

小俣若者政策担当課長兼青少年若者課長

・昨年度、市内の4つの高校の生徒に、探求学習での学習内容について発表してもらう提案発表会を開催した。将来のまちを考えるとという内容では、とかく大人は大きな視点や政治という視点になるが、高校生は身近なところや、生活の中で疑問に思うところ、よくしたいと思うところ、どうにか変えたいと思うところから、さらに広げていくという考え方をしていることに気づかされた。この着眼点は生徒ごとに違うので、ひとつ一つ拾ったらすごいものになると思う。こういう生徒が本日のテーマの年代になっていく、市民参加を考えていただける若者の予備群ということになっていくのだろうと思う。

・昨年度、「若者総合相談センター」を開設した。相談員に利用内容、利用者の声も聞いている。若者総合相談センターは、上手く職場に馴染めない、職が決まらない、学校が続かなかったというつまづきを持った方々が利用している。また、いわゆる進学校に通っているが、以前より成績が落ちてしまい困っているという相談もある。そういった方の話や行動を見て、市民参加に興味がないわけではなく、一番は、「参加しなくても困らない」ということがあると思う。また利用者は親が現役のために、今、自分はゆっくりしていても困らない。もっと言うと、何もしなくても困らないと思っている方もいるようである。だけど、若者総合相談センターを利用し、同じような雰囲気の方、仲間、居場所を見つけた時に、興味のあることはやってみたいということから、数人での趣味のサークルが生まれ始めている。これがさらに進展して、市民活動センターなどで、私たちはこういうことをやっていたが何かできなかつ、というように繋がって行けばよいと思う。彼らにとって続けるということは大変なことで、まずは1回目、2回目を乗り越えないと、なかなか続かない。だから単発で目的がはっきりしていることがよい。実際、若者総合相談センターの利用者が地域ボランティアに参加、体験した後の感想は、少し疲れたが誘ってもらって、やってみてよかったというものだった。この体験の中から自己肯定感も出てきている。ハードルの低いもの、単発で、目的がはっきりしているものできっかけづくりということを若者総合相談センターでもやっていければと思う。

小林会長

・闊達な議論になりました。まだご意見をうかがいたいところだが、最後に山本先生から意見を願います。

山本副会長

・皆様の話を聞いていて気付いた点だが、参加予備群の人たちもシート1枚にまとまっているが、その中にもかなり段階があると思った。少しきっかけがあったり、仕組みがあったり、背中を押すだけで参加できる状態にあるような方たち。何かをしたいとか、仲間をつくるとか、地域に参加するとか、幅広い内容であった。それらがどういう状況にあるのかを把握することが大事だと思う。この審議会でももう少し具体的に何をしていくのか、何を提案できるのかということから、さらにターゲットを具体的に絞れるとよいと思った。

・また、広報、オンラインで情報を得るという話が多かったと思う。これもとても大事なことだが、八王子に住んでいる方からすれば、地域にある施設は身近なもので、かつ、身近ではない人でも施設は必ず近くにあるはず。すでに連携はしているだろうが、

さらに上手く連携し、そこに行けば情報が得られ、顔見知りの方が居たり、今よりももっと身近なところになると思った。この物理的にすでにある施設、これは必ずしもコミュニティセンターである必要はなく、他にも生活に身近な施設が八王子市にもあると思うので、さらなる活用も考えられるだろうと思う。

小林会長

- ・ 皆様の事例から様々な意見をいただいた。行政と市民が活動する際に領域横断的なこと市民参加はやらざるを得ないが、それをサポートする行政側の垣根を乗り越えられるようなワンストップ窓口的なシステムの構築を考えていく必要がある。また、非常に遠い、ジェネラルな、壮大なものよりも、一般的なテーマで、身近な、特定の、焦点化されているものの方が人は動くんだということ。これは本日の共通した意見であった。ここから仲間づくりに広がり、それを乗り越えるとどんどん動き出していく。一方で、情報が届いていないことに関して、ゲームソリューション的な観点から意見をいただいた。また、渡邊広聴課長の野良猫の糞尿に関する事例では、学生に取り組んでもらい、調べてもらい分かったことのような、市民と協働して成果があったことを掴めるプラットフォーム的なものがあればよいが今はない状況である。情報発信をするにしても、その情報発信のフェーズの仕方が重要で、それが届き出せば、そこで自由にコミュニティが活性化していくということを審議会として共有できた。

小林会長

- ・ 次回以降の議論だが、事務局、山本副会長、私で整理させていただく。皆様から、次回の議論内容について何か意見はあるか。
- ・ 特段ないようであれば、本日と同様に次回もさらに議論を膨らませていきたい。

2. その他・事務連絡

小林会長

- ・ その他事務連絡について、事務局より説明を。
(次回日程説明。)

小林会長

- ・ 第4回は令和3年11月17日(水)、第5回は令和3年12月22日(水)の午後6時30分から本日と同じ会場で開催を予定している。詳細は後日改めて通知する。
- ・ 委員、事務局から感想を。

(各委員、事務局より感想を述べる。)

- ・ 以上で、本審議会を終了する。

閉会